

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 29 日現在

機関番号：42698

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730780

研究課題名(和文) 日中の幼稚園の成立と展開に関する比較史研究 - 母親の位置づけを主要な視点として -

研究課題名(英文) A Comparative Study on the Formation and Dissemination of Kindergarten in Japan and China

研究代表者

日暮 トモ子 (Higurashi, Tomoko)

有明教育芸術短期大学・子ども教育学科・准教授

研究者番号：70564904

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円、(間接経費) 330,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、幼稚園の成立と展開の過程を、母親の役割や位置づけを主たる視点に置き、我が国と中国の状況と比較することを通じて、我が国の幼稚園制度の特徴を考察することを目的とした。研究の結果、両国ともに、幼稚園教育が海外から移入された当初、幼児の教育は家庭の母親においてなされるべきものとして幼稚園不要論が存在した。しかし、幼稚園教育の意義が認識されるにしたがって母親の教養の低さが問題となり、家庭で母親が幼児を教育するよりも幼稚園で教育することが教育上相応しいとの意見がみられた。本研究を通じて、幼稚園の成立および展開において母親の教育的役割がしだいに変化していく過程の一端を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to clarify the characteristics of the formation and dissemination of kindergartens in Japan and China specifically in relation to the role of the mother. In terms of the process of formation of kindergarten in both countries, the result found was that it was important for the infant to be nurtured by the mother in her home rather than educated in kindergarten. However, as a result of the dissemination and significance given to kindergarten education, the role of the mother was disregarded as important for the infant due to the low quality of culture and morality. This study shows how the formation and dissemination of kindergarten in both countries is very much linked to the changing role of the mother as somebody who nurtures an infant at home.

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：幼稚園 フレーベル モンテッソーリ 母親 陳鶴琴 張雪門 倉橋惣三

1. 研究開始当初の背景

我が国では、少子高齢化社会の到来や男女共同参画社会の実現を背景として、就学前教育システムの改善に注目が集まっている。待機児童の改善や子どものスムーズな成長・発達を図るために、「幼保一元化」「幼小連携」など新たな形態の教育・保育の在り方が検討されており、従来の就学前教育に対する見直しが行われているといえる。諸外国の就学前教育制度との比較から日本のそれを問い直す研究には多くの蓄積がある。先行研究の成果からは諸外国の就学前教育の動向に関する知見を得ることができる。しかし、我が国の就学前教育制度を客観的に検討するには、我が国に特徴的な幼稚園と保育所の二元システムが構築されてきた幼稚園制度についての歴史的社会的状況を踏まえた議論が必要であると思われる。

こうした視点から、本研究では、我が国の幼稚園制度の特質を明らかにするために、その成立過程と展開過程に着目した。そのさい、日本から幼稚園を導入し、また、ほぼ同時期に海外の教育理論や教育方法を受容した中国を比較対象とした。日本と中国は同じ地域圏・文化圏にあるものの、それぞれの国が抱えている教育課題や歴史的社会的状況が異なるために、西洋近代教育の受容の在り方は一様ではない。日本と同様に、西洋近代教育の影響を受けながら教育の近代化を遂げてきた中国との比較を通じて、日本の特徴を導き出すことができるのではないだろうか。

本研究で日中両国の教育近代化の中でも就学前教育、特に幼稚園教育に着目した理由は次の点にある。19世紀後半から国民教育制度が整備されるにつれ、さらに新教育以後の20世紀に入ると「学校」中心の時代へと移行していく歴史がある。こうした教育状況を背景に、20世紀前後に海外から日本と中国に幼稚園制度が移入された。その移入形態をみてみると、欧米の多くが「幼稚園」を「学校」として位置づけていたにもかかわらず、海外から幼稚園を移入した日本と中国では「幼稚園」を「学校」としてではなく、「家庭教育を補完するもの」として考えられていた。幼稚園の創始者であるドイツのフレーベル(1782-1852)は、幼稚園での教育をより良いものにするために家庭の変革を行い、良き母を育てるための教育を論じた。一方、「モンテッソーリ・メソッド」やモンテッソーリ教具に代表されるイタリアのモンテッソーリ(1870-1952)は、子どもの自発性や自己活動を重視するものの、家庭や母親への配慮や関心はみられない。幼児教育において代表的な人物である2人の母親に対する関心の相違は、両者の理論を受容しながら発展してきた日中の幼稚園の成立と展開にどのように関わるのか。このことについて、従来の研究は自覚的な視点を設けてこなかった。家庭教育を補うものと捉えられていた両国の幼稚園論の中で母親はどのような役割を担って

いたのか。

こうした関心から本研究では、幼稚園の成立及び展開の過程において当時の教育論や幼稚園論で語られる母親の位置づけや役割を確認し、我が国の幼稚園制度の特質を明らかにすることを目指している。

2. 研究の目的

本研究は、幼稚園の成立と展開の過程を、母親の役割や位置づけを主たる視点に置き、我が国と中国の状況と比較することを通じて、我が国の幼稚園制度の特徴の一端を明らかにするものである。両国はいずれも海外から幼稚園が移入された経緯を持つ。その過程で母親の教育的役割の語られ方、および、その語られ方の変化を比較によって明らかにする。このことによって、幼稚園論の中で母親の姿が消え、幼稚園がしだいに学校化していく過程を指摘することができるだけでなく、幼稚園論と母親論、幼稚園論と家庭教育論との関係を問わずに、幼保連携・幼小連携など制度面の統合のみが強調されている今日の我が国の就学前教育政策の展開を批判的に検証するための知見を得ることがねらいである。

3. 研究の方法

研究目的を達成するために、以下の計画に基づき研究を進めた。

(1) 先行研究および史資料の収集・分析

日本と中国の幼稚園制度の成立と展開の過程を整理するために、それぞれの国ごとに幼稚園の草創期と展開期にわけて、先行研究の収集と史資料収集等、文献調査を実施した。文献収集は、日本では、国会図書館、大学図書館、東洋文庫などで行い、中国では、国家図書館、上海図書館、北京大学、北京師範大学、北京市檔案館などで行った。

(2) 国内外の専門家からの聞き取り調査

中国・台湾での史資料収集とともに、海外の幼児教育研究者から、今日の幼児教育研究の動向、フレーベルおよびモンテッソーリ関連の研究動向、史資料の所在等について情報交換を行った。専門家からの聞き取りを通じて、日本と中国の幼児教育研究におけるフレーベルとモンテッソーリの位置づけについて確認することを目的とした。

(3) 研究の総括

文献調査および聞き取り調査の成果を踏まえ、幼児教育において代表的な人物であるフレーベルおよびモンテッソーリの母親に対する関心の相違を手がかりとして、両者の理論を受容しながら発展してきた日中の幼稚園の成立と展開の特質を比較考察した。

4. 研究成果

(1) 日本の幼稚園の草創期(明治期)・展開期(大正~昭和期)における母親の位置づけ

本研究では、国吉栄『日本幼稚園史序説 -

関信三と近代日本の黎明』(2005)、同『幼稚園誕生の物語 - 「謀者」関信三とその時代 - 』(2011)、湯川嘉津美『日本幼稚園成立史の研究』(2001)、柿岡玲子『明治後期幼稚園保育の展開過程 - 東基吉の保育論を中心に - 』(2005)、浦田まり子『明治期の幼稚園教育におけるフレーベル思想の受容』(1976)、児玉依子『フレーベル近代乳幼児教育・保育学の研究』(2009)、西川ひろ子『大正期におけるモンテッソーリ教育法の受容 - モンテッソーリ教具を中心に - 』(2000)などの先行研究を手がかりに分析を行った。児玉は、フレーベルが家庭での母親の育児書として記した『母の歌と愛撫の歌』(1844)が日本で原著に即して翻訳されたのは1934年と指摘している。日本に幼稚園制度が導入された当初、恩物の紹介に重点があり、母親の役割に関心があまり払われなかったことが、ここから推察された。また、西川は、アメリカやイタリアではフレーベルとモンテッソーリとが対立的に認識されがちであったにもかかわらず、日本ではフレーベルの恩物とモンテッソーリ教具が併用して用いられたところに日本の保育状況の特質を指摘する。フレーベルとモンテッソーリが矛盾なく受容された過程では、当時の教育者は両者の母親論の相違に自覚的でなく、恩物と教具の関係の処理に重点があったと考えられた。

研究成果として、今日の日本の就学前教育・保育システムの課題について検討を行い、論文にまとめた。個別化、多様化する母親のニーズに対応するかたちで就学前教育・保育の形態が変化している実態を指摘した。

(2) 中国の幼稚園の草創期(清末)・展開期(民国期)における母親の位置づけ

中国に関しては、平成23年度に海外調査を2回(9月と3月)実施した。さらに、平成24年度9月から平成25年度7月にかけて現地に長期滞在し、史資料収集、専門家からの聞き取り調査、幼稚園訪問を行った。追加調査として、平成25年12月に上海図書館で史料収集を行った。

史資料収集では、『教育雑誌』、『中華教育界』、『新教育』など当時の代表的な雑誌等に掲載されているフレーベルやモンテッソーリ関連の記事を収集した。また、関信三編集・小俣規義訳『幼稚教育恩物図説』、『教育世界』(1903)、東基吉著・周銘訓編訳『幼稚園保育法』(1907)、顧樹森『蒙鐵梭利女史新教育法』(1914)、今西嘉蔵著・但薫訳『蒙台梭利教育法』(1914)、裴雷著・顧樹森・王維尹編訳『蒙鐵梭利教育之兒童』(1917)、張雪門『蒙台梭利及其教育』(1929)など当時の幼児教育研究者の論文・著作の収集を行った。

史資料の分析、専門家からのインタビュー等から以下のことが明らかになった。

中国においてフレーベルの恩物とモンテッソーリの教具の紹介は、1910年代前後から、日本経由とアメリカ経由の双方で行われた。恩物は日本経由の紹介が多いが、教具につい

ては日本経由とアメリカ経由で行われていたことが明らかになった。

恩物と教具については当時対立的に紹介されることもあったが、大半は相互補完的なものとして紹介されていた傾向を確認した。これは、日本での紹介のされ方と類似していた。

1910年代から1920年代にかけて中国でモンテッソーリ教具の使用が推奨された背景には、教育を理解しない婦人が家庭で幼児を教育するよりも幼稚園で教具を用いて教育をするほうが教育上好ましいとの意見があり、家庭での母親の教育的役割に対する批判的意見が存在したことが明らかになった。

モンテッソーリ教具については、その使用が固定的、限定的であって、児童の個性と需要に合っていないという、モンテッソーリ教育の原理そのものへの批判が時代を下るにつれて登場した。1930年代に入ると、中国の中央教育行政機関によって、教具購入は不経済で、設計教授法(プロジェクト・メソッド)のほうが経済的であるとの見方が示された。これを契機として、中国ではモンテッソーリ教具が衰退していったことが明らかになった。

専門家からの聞き取り調査を通して、戦前の中国では日本に比べ、モンテッソーリ教育法への関心は低く、むしろ1980年代から90年代にかけて広く知られるようになったことを再確認した。さらに、今日モンテッソーリの教育法を実施している中国の幼稚園は、その理論や方法的関心からよりも、園児募集対策など、商業的側面から同法を実施している面が強い状況を知る機会となった。

研究成果として、中国のモンテッソーリ教育法の受容に関して学会発表を行った。また、現在の日本の就学前教育制度・政策の動向に関して海外で報告を行い、中国人研究者と意見交換をした。さらに、本研究に関連して、中国の教育部が2011年から2015年までの5か年の教育事業の改革方針を示した「国家教育事業第12次5か年計画」(2012)、幼稚園と家庭において科学的な保育の実施を指導するために教育部が発表した「3~6歳児の学習と発達の手引き」(2012)、中国の子どもの教育・福祉・健康に関する指針として国務院が発表した「中国の子どもの発達に関する要綱(2011-2020)」(2011)を訳出し、研究者間で共有した。

(3) 研究成果の総括

本研究開始当初、日本と中国の幼稚園制度の展開過程において、フレーベル受容およびモンテッソーリ受容の在り方の違いから、中国に比べて日本の幼稚園論では母親の教育的役割がしだいに軽視されるようになり、幼稚園制度自体が学校化していったのではないかという仮説を立てた。また、フレーベル受容は両国とも知育中心で行われたが、モンテッソーリ受容については、今日の中国におけるモンテッソーリブームを背景として、日

本とは異なる展開が認められるのではないかと、といった仮説から検証を行った。

本研究の結果、両国ともに、幼稚園教育が海外から移入された当初、幼児の教育は家庭の母親においてなされるべきものとして幼稚園不要論が存在した。幼稚園教育の意義が認識されるにしたがい、母親の教養が問題となり、家庭で母親が幼児を教育するよりも幼稚園で教育することが教育上相応しいとの意見が両国においてみられた。恩物や教具の紹介においても、両者は対立するものではなく、併用して用いることに効果があるといった見方が、日中双方において認められた。

今日、子育ての負担は家庭における母親がイメージされるが、そもそも子育てに母親が登場するのは近代以降である。哲学者ロック(1632-1704)は、父親と母親に子どもを教育する義務と責任があるとして「親権」を論じた。ルソー(1712-1778)に至り、子どもの成長・発達における母親の教育的役割の重要性が示された。今日の幼稚園の原型を示したフレーベルも幼児期における母親の教育的役割の重要性を語っていた。本研究の結果から、幼児期の教育を担う機関としての「幼稚園」が普及していく過程で、フレーベルのねらいとは逆に、家庭における母親の教育的役割が薄れていく様子が日中両国に共通して認められた。本研究を通じて、両国の幼稚園の成立および展開において、家庭での母親の教育的役割がしだいに変化していく過程の一端を示すことになった。幼稚園制度と母親の教育的役割が密接に関係していることを例証することにもなった。

(4) 本研究において残された課題

本研究において日本と中国との比較史研究を試みたが、中国での調査の時間を確保できた反面、近代日本の幼児教育者の言説の分析や日中比較を十分に行えなかった。また、恩物や教具の両国の受容の在り方について、当時の幼稚園でのカリキュラム等、具体的な実践事例に基づいて分析をすることができなかった。さらに、中国の場合、モンテッソーリ教育法の紹介は日本経由とアメリカ経由で行われていたが、この2つの流れにおける紹介のされ方の相違の分析にまで至らなかった。以上が今後の課題として挙げられる。これら課題については、すでに史資料等は入手しており、継続して分析をすすめることとしたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

小鴨成夫、日暮トモ子、藤井喜一、都市の幼保一体化施設の機能と役割に関する予備的考察、査読有、有明教育芸術短期大学紀要、第4巻、2013、pp.19-31

日暮トモ子、小鴨成夫ほか、都市と農村の保育・子育て支援システムの比較(2)、査読有、有明教育芸術短期大学紀要、第4巻、2013、pp.3-18

〔学会発表〕(計3件)

日暮トモ子、近代中国におけるモンテッソーリ教育法の受容に関する考察、幼児教育史学会第9回大会、2013年11月30日、青山学院女子短期大学

日暮トモ子、日本の学前教育状況 - 以幼保一体化改革為主 -、北京師範大学珠海分校国際教育フォーラム、2013年3月27日、北京師範大学珠海分校

日暮トモ子、都市と農村の子育て支援の在り方に関する一考察、日本教育学会第71回大会、2012年8月26日、名古屋大学

〔図書〕(計1件)

日暮トモ子(長島啓記編著)、基礎から学ぶ比較教育学(第1章 就学前教育・保育)、学文社、2014、230(pp.19-27)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

日暮トモ子(Higurashi Tomoko)

有明教育芸術短期大学・子ども教育学科・准教授

研究者番号：70564904

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし